

戦争とわたしたちの暮らし

昭和20年(1945)8月14日、日本はポツダム宣言を受諾し、翌15日に連合国側に無条件降伏しました。日本はGHQの統治下の元、非軍事化、民主化が進められ、日本国憲法の制定を始めとしたさまざまな改革を実施し、昭和26年(1951)9月8日、サンフランシスコ平和条約に調印し、国際社会へと復帰を果たしました。戦後77年、日本は戦後復興、高度経済成長により、めざましい発展を遂げ、不戦・平和の誓いの元、平和と繁栄を享受してきました。

今、戦争の悲惨さや恐ろしさを知る人々は減り、日本人にとってそれは過去のものになりつつあります。しかし反面、世界に目を向けると、ロシアによるウクライナ侵攻をはじめ、アフガニスタン、シリアなど未だに各地で武力紛争が勃発し、多くの一般市民が犠牲となっています。

改めて戦争と平和について考え、二度とあのような悲惨な出来事がおこらないように、またおこさないように、そして、今の平和を次世代に伝えていく一つのきっかけにしたいと願い、企画いたしました。

戦争で、家族を失った人々の悲しみ、また戦時中にあっても希望を失わずにたくましく生き抜いた人々等、「人」に焦点をあてた資料約30点を展示いたしましたので、皆さまぜひご覧下さい。

会 場	米澤記念館
会 期	令和4年5月12日(木)～9月20日(火)
開館時間	午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
休館日	水曜日
観覧料	無料



インターネットからも、解説をご覧になれます。

QRコードはこちら→

戦争とわたしたちの暮らし展示品リスト

テーマ	文書名	和暦
家族との別れ	部隊帰還ニ関スル件	昭和14年12月18日
	入善駅で出征兵士の見送り	昭和17年頃
	戦死兵士の町葬	昭和17年12月
	戦死者遺家族に勤労奉仕	昭和17年5月
	『村と戦争～兵事係の証言～』	
戦中の子どもたち	新屋小学校剣道・なぎなた授業風景	昭和16年頃
	小学国語読本尋常科用 巻十	昭和12年
	初等科図画 一	昭和16年頃
	疎開者、誓	昭和20年5月3日
銃後の備え 戦中・戦後の暮らし	櫛山国民学校の忠霊塔除幕式	昭和15年4月18日
	国防婦人会	昭和16年
	立木伐採供出	昭和17年頃
	春日明栄寺の釣鐘の供出	昭和18年頃
	物資統制等に関し協議会開催通知	昭和14年11月24日
	疎開先学童後援会書類	昭和20年5月8日
	大政翼賛会下新川郡支部成立につき郡支部顧問指名	昭和20年5月8日
戦地からの便り	陸軍軍事郵便、戦死の模様を知らせる書状	昭和14年(カ)1月8日
統制下の暮らし	故米澤紋三郎翁銅像供出修祓式式次	昭和18年3月21日
	米澤紋三郎銅像の写真	大正9年12月
	物資配給状況	昭和15年6月
	入善町青年団銃後活動状況	昭和14年11月1日
終戦からの出発	ポツダム宣言受諾の日の「学校日誌」	昭和20年8月15日
	昭和天皇、入善小学校へ行幸	昭和22年11月1日
	米澤元健町長、憲法発布に際し祝辞朗読	昭和21年11月3日
	金融封鎖に関する役場文書	昭和21年10月11日
	農地改革のPRパンフレット	昭和22年3月10日
	証紙を貼付した日本銀行券引換について回覧	昭和21年10月11日
子どもたちの戦後	「日本のむかしと今」	昭和24年12月
	「世界地図」	昭和24年5月
	小学国語第四学年 上	昭和22年
	小学国語第四学年 下	昭和22年

戦争への歩み

「軍部や右翼勢力は国民の不满を侵略戦争に利用し、改革の気運をそらそうとした。それが、満州事変にはじまり太平洋戦争の敗北に終わる、いわゆる十五年戦争のはじまりである。」(『入善町史 通史編』より抜粋)

昭和6年(1931)9月18日、日本軍は、日本が支配していた南満州鉄道の線路をみずから爆破し、中国東北へ侵略をはじめた。若槻内閣は不拡大方針をとったが、関東軍(関東州および満州に駐留した旧日本陸軍の部隊。)は東北三省を占領。翌年、「満州国」を樹立し、以後15年に及ぶ日中戦争の発端となった。満州事変の進展にともなって、軍部や右翼を中心とする全体主義的な国家改造運動が活発になり、昭和7年(1932)5月15日、海軍の青年将校を中心とした一団が国家改造を目指し、犬養毅首相を暗殺(五・一五事件)。このことがきっかけとなり、大正末から続いてきた政党政治が終わりを告げ、政治に対する軍部の影響力が増大していくことになる。また、全体主義的傾向は、しだいに学問や思想の面にも影響を及ぼすことになっていく。

このような世情の中、一部の陸軍青年将校が軍部政権の樹立を目的に千数百名の兵を率いて首相以下の重臣を襲撃する事件、いわゆる二・二六事件がおこる。この事件は失敗に終わったが、人々にあたえた衝撃は大きく、事実上、軍部の意向が政治を左右するようになった。

一方、そのころ、第一次政界大戦の敗戦で、各国から巨額の賠償金を請求されていたドイツでは、世界恐慌によりさらなる大きな経済危機に直面していた。その中で、昭和8年(1933)、ヒトラーが首相に就任すると、ナチス一党独裁体制をとり、ヴェルサイユ条約を破って再軍備をすすめることになる。再軍備のなったドイツは、昭和13年(1938)オーストリアを併合し、ついでチェコスロヴァキアにも手を伸ばした。この時、イギリス・ドイツ・フランス・イタリアの4ヶ国首脳によるミュンヘン会談が開かれ、イギリス側の

譲歩により戦争の危機は一時避けられた。しかし、ドイツはさらにポーランドの分割をはかり、まず昭和14年(1939)8月、ソ連との間に独ソ不可侵条約をむすんで、イギリス・フランスを牽制しつつ、9月いっきょにポーランドに侵入した。ここに、イギリス・フランスはドイツに宣戦を布告し、ついに第二次世界大戦がはじまった。

ドイツ軍はたちまちポーランドを席捲、昭和15年(1940)にはイギリス軍を大陸から追い出し、6月にはフランスを降伏させた。このドイツの

めざましい勝利は、日中戦争の処理に苦慮していた日本に新しい動きを引き起こすこととなった。国際連盟からも脱退し、孤立していた日本は、ドイツ・イタリアへの接近を強め、昭和15年9月、第2次近衛内閣によって日独伊三国軍事同盟が結ばれることになったのである。そしてこの同盟は、予想以上にイギリス・アメリカを刺激することとなった。

昭和16年(1941)初頭から日米交渉が開始されたが、交渉の前途は暗く、7月、日本が、南部仏印に兵をすすめて南進政策を明らかにすると、アメリカは態度を硬化させ石油の日本向け輸出を全面的に禁止した。さらに、10月、近衛内閣が総辞職し、陸相であった東条英機が内閣を組織すると、アメリカの対日感情はますます悪化した。和平交渉の道は閉ざされ、12月8日、ついに日本は、ハワイの真珠湾を奇襲して、アメリカ・イギリスに宣戦布告をし、太平洋戦争に突入することになる。

家族との別れ

徴兵令が公布されて以来、戸籍簿に基づき、徴兵適齢者（翌年満20歳になる男子）は、徴兵検査を受けなければならなかった。検査によって体格別に甲乙丙丁の4種類に分けられ、甲種合格者は現役兵としてすぐに入営し、その他は、召集令状、いわゆる赤紙によって徴兵された。赤紙の受け取り拒否は許されず、徴兵拒否は非国民として重罪に問われた。

戦争の激化に伴い、徴収率（徴兵検査を受けた人のうち現役兵として徴収された人）も、昭和12年(1937)に25%であったのが、昭和19年(1944)には77%、終戦間際の昭和20年(1945)には90%に跳ね上がった。

さらに、徴兵年齢も引き下げられ昭和18年(1943)には満19歳に、翌19年(1944)には、満17歳以上の者とすると同時に、満17歳未満の志願も可とした。

入善町では、昭和14年(1939)頃までは、流し旗やのぼり旗をたて、ブラスバンドなどのほか在郷軍人会や国防婦人会、銃後奉公会など、村中総出で出征兵士を入善駅で見送ったが、戦争が激しくなるにしたがい、流し旗などは禁止されるようになっていく。

展示の写真「入善駅で出征兵士の見送り」は、寄せ書きの日の丸でたすきをし、生きては帰らぬ覚悟の出征兵士の姿が映し出されている。

戦中の子どもたち

第二次世界大戦末期、東京都をはじめ全国の主要都市に住む子どもたちの多くは「疎開」を体験した。これは子どもたちを戦火から守るためであるが、全国で約45万人の子どもたちが親元を離れ耐乏生活を強いられることになった。親類縁者をたより、個人的に疎開してきた人たちは縁故疎開とよばれ、学校を単位として実施された疎開は、「学童集団疎開」とよばれた。

富山県では、東京都の学童集団疎開児童約1万5,000人を受け入れた。受入先は、富山・高岡両市及び山村部を除く、鉄道駅から4km以内の町村部で、寺院や旅館を中心に290箇所及び、それらの寺院や旅館は「学寮」とよばれていた。

疎開児童の生活は、学寮によって異なっていたが、入善町には、栢山村の常福寺学寮があった。常福寺学寮の東糶谷国民学校の子どもたちは、勉強の他に、掃除や草むしりなどをして一日を過ごし、就寝時には、東京の方角を向き、「お父さんお休みなさい。お母さんお休みなさい。」と言って眠りについたという。子どもたちは遠く親元を離れた異境の地で、食料やあらゆる物資が不足する窮乏生活に健気に耐え、また、受入側では、子どもたちの心情を思いやり、親身になって世話をする姿があった。

のちに芥川賞を受賞した柏原兵三も、親類をたよって入善町に縁故疎開を体験したひとりである。そして、その当時の体験を長編小説『長い道』として公表している。

また同じ頃、朝日町山崎に藤子不二雄[㊤]が疎開していた。藤子は自分の体験と柏原の『長い道』を重ねあわせ、漫画『少年時代』を公表した。

そして、この2つの物語をベースに、入善町・朝日町・黒部市を舞台とする映画「少年時代」がつくられている。

銃後の備え 戦中・戦後の暮らし 統制下の暮らしたち

日中戦争開始後、第一次近衛内閣により出された国民精神総動員実施要項は、挙国一致・尽忠報国・堅忍持久を目標に国民を戦争に協力させるための要項であった。

昭和12年(1937)10月には全国的に「国民精神総動員強調週間」がおこなわれ、県内でも、出征兵士慰問、その遺家族扶助の共同労働、生活費節約による国債購入、毛織物・金属・ゴム・紙類等の消費抑制等が奨励された。翌13年(1938)には、国家総動員法が成立したが、これは、人的・物的資源の統制運用を目的としたもので、広範な権限が政府に与えられ、戦時体制はいよいよ強化されていき、人も物もほとんど戦地へ送られていった。

入善町でも、「戦争に勝つためには、一片でも多く鉄や銅を、お国のためにだしてください」と大政翼賛会富山県支部がビラを各戸に配布し、春日明栄寺をはじめ、町内各寺院の釣鐘が供出された。

また、昭和17年(1942)4月に定められた「かいにふ(屋敷林)立木伐採に依る軍需用材供出要項」により、スギ、ヒノキ、マツ、ケヤキなども軍用材として供出された。

一方残された人々にも、銃後を守る大切な役割があった。女学校では、愛国女子団が作られ慰問袋作製などが奨励され、出征のために農工労働力が不足した農村地帯では、馬耕も女性の仕事になった。

また、「軍人のご家庭は先ず隣組で守りましょう」をスローガンに、国防婦人会や隣組で勤労奉仕も行われている。

花地からの便り

名誉の戦死をつげる便りである。

遺族は、どのような思いで便りを読んだのであろうか。

終戦からの出発

敗色濃厚の日本は、昭和20年(1945)4月の米軍の沖縄上陸を機に、鈴木貫太郎内閣が成立すると、戦争の終結を急ぐようになった。

富山湾にも無数の機雷が投下されるようになり、船舶の安全運行が難しくなってきた。8月2日午前0時36分から1時間51分にわたり米軍B29の爆撃により、富山市は廃墟と化した。さらなる空襲への不安を募らせているところへ、8月15日、これまでの歴史で体験したことのない「敗戦」という事態に直面した。

飯野村立国民学校の「学校日誌」には、次のように当日の様子が記されている。

八月十五日 快晴 三十二度

ポツダム宣言受諾

- 一 日本領土＝九州、四国、本州、北海道ノミ
- 一 天皇の主権ハ認メル
- 一 総武装解除
- 一 現物賠償
- 一 再軍備ヲ許サズ

呼鳴（ママ）何事カ云ハン

日誌書ク手モ進マズ

何故ニ戦ツタノカ

何故ニ働イタノカ

涙滂沱トシテ流ル

何物モ手ニ付カズ

職員一同集ツテ

過去ヲ語り未来ノ想像

ニ花咲カス

敗戦の痛手は国民生活に容赦なく襲いかかった。戦後の物資不足はむしろ戦争中よりもひどく、特に食糧不足は生命さえも脅かすほどであった。特に、終戦の20年は、富山県内は悪天候に悩まされ米の減収が著しかった。入善町でも昭和になって最低の終了を記録している。農家に対しては、強制的に供出を割当、早場米奨励金や報奨物資の支給などを行ったが、凶作の中では農家自体、米の確保が困難であった。

終戦まで戦争遂行の号令をかけていた地区の指導者たちは権威を失い、代わって地域の中心となった人々も将来についての展望が描けずにいた。何もかもが手探りの状態で進んでいったと言えるであろう。

日本の民主的諸改革を進める中で、農地改革が行われ、それは、農村の民主化と農業発展の基盤となった。農村の土地所有が一掃され、耕作農民が地主にかわって農村の主体となったのである。教育面でも、従来の軍国主義教育が、連合軍の指示により全面的に廃止され見直しがおこなわれることになった。

少しずつ、人々は新しい生活を受入れ、混乱と苦悩と不安の中にあっても、たくましく生き抜いていくことになる。